

引き戸が閉められるダウンという音で目が覚めた。十亀俊司が顔を上げると、周囲には誰もいなかった。誰一人として。

廊下側の窓ガラスの向こう、歩いていく集団が見える。同じクラスで、後ろの席の柴崎と二宮、そいつらと仲のいい伊藤と浜口。あの乱暴な音は、そいつらのうちの誰かに違いなかった。ギャハハとアホみたいな笑い声が、窓越しに聞こえる。

四人の中、二宮がフツとこちらに振り向いた。視線は合ったが、次の瞬間にはスツと逸らされる。そいつらが行ってしまったあとも、廊下は足音や話し声でザワザワと騒がしかった。

正面の黒板には「理科総合、第三教室」と汚い字で殴り書きしてある。その上にある時計は、十時二十八分。休み時間はあと二分で終わる。

椅子から立ち上がると、ペンケースと教科書、ノートを取り出した。移動するのが面倒くさい。第三教室は別棟だし、階段を上らないといけないし、廊下に出たらきつと寒い。サボるか……と甘い誘惑。二学期に相当さぼって担任に注意を受けた。留年するぐらいならサッサと辞めるが、そうすると高校に通った十ヶ月が勿体ない。それなら最初から働いていた方がよかった。

三学期はまだはじまっただけ。大きくため息をつき、勉強道具を手に教室を出た。廊下を歩いている間にチャイムが鳴りはじめる。それでもかまわず同じ歩調で階段を上っていると、背後からバタバタと慌ただしい足音が近づいてきた。

「お前、重役出勤だな」

振り返ると、担任のトラが背後に立っていた。本名は厚美蚕太だが、みんなトラと呼ぶ。上の学年から、ずっとその呼び名で通っている。映画俳優の役名からきているらしいが、十亀はその有名なシリーズ物を見たことがない。

「たりーし」

「俺より若いんだから、サッサと行け」

トラは今年、三十六だ。太っていて眼鏡で、頭の天辺が薄くなってきた。若ハゲだ。ハゲのトラに出席簿で背中を叩かれて、十亀は舌打ちしながら少しだけ足を速めた。

「はい、これまで」

ハゲトラの声と共に、一斉にガタガタと椅子を引く音がした。十亀は両目を擦り、大きく欠伸をする。また寝ている間に授業が終わった。形ばかりひるげられたノートは、一行たりともシャーペンを走らせた記憶がない。黒い学生服の集団が、解き放たれた鳥みたいに我先にと教室を出ていく。

机に突っ伏したまま、騒々しさがなくなるのを待つ。最後の一人が出ていってから、ノソリと立ち上がる。昔から人混みも集団も嫌いだ。開きっぱなしのドアから俯き加減に廊下へ出ると同時に、ドツと何かぶつかってきた。

「うっ」

衝撃で教科書とペンケースを落とす。……激突してきたのは、同じクラスの二宮比呂志。背が一六〇センチをようやく超えるぐらいと低く、頭も体も小さい。よく喋るうるさい奴だ。

二宮は屈み込む。落としたものを拾ってくれようとしているようだ。十亀も反射的に膝を曲げる。すると今度は立ち上がろうとした二宮の小さな頭がゴツと顎に命中した。一瞬、目から火花が出たかと思った。予想してなかったアッパーに十亀はのけぞるようになって後ずさり、二宮も「痛くてえ」と呻いて右手で頭を押さえた。「うはははっ」

顎を押さえている十亀を見て、うるさいチビはなぜか笑った。

「あー悪い、悪い」

二宮は笑いに震える手で、拾い上げた本とペンケースを差し出してくる。十亀はそれを引ったくるようにして取った。

「笑ってんじゃねえよ」

怒気を孕んだ十亀の声に、曇りなく笑っていた表情が瞬間冷凍みたいに凍りつく。

「俺マジ痛いんだけど。それに何が悪い、悪いだ。お前、ちつとも悪いと思ってるねえだろ。なら何も言うな、アホ」

啞然とした二宮を突き飛ばし、十亀は教室に戻った。しばらくムカムカしていたが、それも次の授業がはじまって、日差しがベールのように全身に絡んでくる頃には、だいぶ薄れてきた。

窓際の席は暖かい。夜は寒いから、ずっと昼のままがいい。それと早く春になってほしい。冬は寒い。十亀はもし今度生まれ変わるなら猫がいいとそう思った。

放課後、ホームルームが終わると自転車で町はずれのガソリンスタンドに直行する。「いらっしやいませ」「ハイオクですか、レギュラーですか?」「会員カードはお持ちですか」と軽く五十回は繰り返し、ガソリンの匂いで嗅覚が麻痺してきた頃、ようやく仕事終わりの十一時になる。

バイト先から家までは自転車で十五分。住宅街の中でも一際目立つ、古くてぼろい家。自転車を庭に置き、家の鍵を取り出す。玄関灯がついてないので暗くて、鍵穴に差し込むのに二回失敗した。引き戸のドアは開け閉めするたびに、ガラガラとうるさい音がする。

廊下も暗いが、居間を仕切る襖の隙間から細く光が漏れる。床板がミシミシと軋む廊下を抜け、襖を開ける。擦れた畳敷きの六畳間の真ん中で、姉の小春は膝を抱えてテレビを見ていた。セーターとスカートは今朝仕事に出ていった時と同じ。体を洗ってはいないようだった。

台所の給湯器はこの家に来た時から壊れていて、年末に風呂の湯沸かし器までイカれた。修理するような金がないので、台所で湯を沸かし、みんなそれで体を洗っている。

小春は風呂が壊れたその日、髪を切った。肩につく程度ともたら長くはなかったのに「髪洗うの、面倒くさい」と男のような短髪にした。二十一歳の女の台詞じゃなかった。

いつも食事が用意されている小さな座卓の上には、何も無い。台所へ行って見たが、生米とふりかけしか見つけられなかった。

「小春、俺のメシは」

弟を無視したまま、小春はテレビに見入っている。

「返事しろ、おい！」

大きな声を出すと、ようやく振り返った。左右に離れ気味の小さな目が、こちらを睨みつけている。

「ねえ俊司、あたしに何か言うことない？」

小春の声は低い。

「別に何もねーよ。メシは」

「今だったら許したげる。だから正直に言いなさいよ」

チツと舌打ちして十亀は学生鞆を畳に投げつけた。

「お前、何ワケのわかんねーこと言ってるんだよ。メシはどこにあんだよ」

小春は目を細め、鼻先でフツと笑った。

「あんたなんか飢え死にすればいいのよ」

吐き捨て、小春は立ち上がった。

「どーしてメシ抜きなんだよつ。ふつぎけんな、テメエ」

罵声をシャットアウトするように小春は隣の部屋に入ると、襖をびしゃんとたてた。仕方がないので、十亀は自分で米を洗い、一人分だけ炊飯器にかけた。同時に湯を沸かす。飯ができるまでに体を綺麗にしようと思ったのだ。

大きな鍋でグラグラと沸いている湯を見ながら、何か小春を苛立たせることをしたろうかと考えたが、心当たりがなかった。ひよつとしたら八つ当たりされただけかもしれない。勤め先の工場で面白くないことがあったとか。そう思うと、理不尽さに苛立ちがつのってくる。

ようやく湯が沸いた。熱湯を風呂場にかけていったらいに移し、水を混ぜる。急いで服を脱ぎ、体を洗う。一瞬だけ体を温める湯も、周囲に熱を奪われて肌の上ですぐさま水になる。寒い。震えながら手や髪を洗う。石けんをつけて擦っても、ガソリンの匂いはなかなか消えない。

不便な生活を辛くとは思わない。食べられるだけ、屋根のついた家で寝られるだけ、体を綺麗にすることができるだけ百倍マシだ。

六年前まで自分たち家族……父親、小春、弟の俊介、自分の四人は公園で暮らしていた。俊介が一歳になるまではアパートに住んでいたが、父親がギャンブルにのめり込み、借金を抱えたせいで家賃が払えなくなり追い出された。

賭け事に負けては酒を浴びるほど飲み、肝臓を壊した父親は入退院を繰り返している。今はちよつど悪い時期で入院中だ。家に帰ってくると借金をしてでも酒を飲み、病院にいれると入院費がかさむ。どっちにしても金と手のかかる父親だった。

小春が中卒で工場に就職した六年前、勤め先の工場主の好意で廃屋同然だったこの家にタダみたいな値段で住めることになり、自分と俊介はようやくまともに小学校へ通えるようになった。それまでは父親の気まぐれで住処の公園がコロコロ変わったので、ほとんど学校に行っていないかった。

体を洗い終え、震えながらトレーナーとジャージに着替える。台所へ行き、流しの前に座り込んで、メシが炊きあがるのを待つ。俯くと、濡れた前髪が額に貼りついて鬱陶しかった。そろそろ小春に髪を切ってもらおうと思っていたのに、あの機嫌だとしばらく無理な気がした。